

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

旧友達との住まい談義

この時期、なぜか同期会や同窓会等の話が舞い込む。今回も学生時代一緒だったサークルの男性達から声が掛かり、事前打ち合わせをこのことで数名来社された。設計やデザインで当社との関わりもある人達だったので、会社のモデルルームを紹介したあと、夜の新宿で再会の祝宴を兼ねて打ち合わせをすることにした。

何十年も会っていない人との再会は勇気がいる。ましてや相手が男性の場合には、まず私の事が分かるだろうか？ と心配する。

今回はその必要はなく、相手は私の写真を新聞やネットで見せていたせいか、エレベーターホールで私に向かって手を振ってくれた。だがこちらが分からない。誰なのだろう？ まさかこの人が……。大変失礼をしてしまったわけだが、そこは昔のサークル仲間なので、気がすくじにわかり、それぞれのこれまでの人生を語り合った。まずは病気の問題から始まり、私も昨年肩の骨を折った事で話は弾み、何より健康が大事となる。そして親との同居や

介護、子供の独立や独立しない子など、それぞれの今までの人生を一気に語り合っただが、建築仲間としてキーワードはその時家をどうしたかだ。

両親そろっての二世帯住宅と、どちらかを亡くされ片親になってからの二世帯住宅の違いはどこにあるのか。面積配分で片親の部分は五〇平方メートルという方がいた。この数字は当研究所でも扱った面積と一致し、ひとり暮らしの方の家づくりにも通じる。

また今後も家に居続けるであろう子供がいるなら、大人の子供との距離をどうとるのか。ゾーンの課題や生活動線の問題など、暮らし方が家の設計に大きく関わっていることを再確認すると同時に、誰にでも人生の節目に住宅の問題、そしてそこにリフォームがあったのだと改めて感じた。

仕事の上でいろいろな方の人生を垣間見させていた。つつがなく過ごされていくようでも、盛りだくさんの課題を乗り越えていくことが多い。リフォーム相談を受けているのか、人生相談をさせて頂いてい

るのか分からなくなることもあるのだが、その中でも最近では相続にまつわる家の問題が目につく。

二世帯住宅にしたものの、晩年は他の姉妹の家に親御さんが移られたなど聞くと、相続時にもめないようにするには家問題の整理が必要だなと思ってしまふ。きれいに我が家をする事よりも、事前にもっと考えておくべきことがあるのではとも……。

リフォームは家の不満を払拭し、夢や希望を叶える最大の手法だと思っただが、いつまでの、誰のための夢の実現なのかを押しやる必要があるだろう。意外と「いつまでの」というフレーズを飛ばして考えてしまっただけがある。もちろん人生最後まで使い続けるための家づくりもあるとは思っただが、何かあるかわからない人生の中で節目、節目に、あるいは一〇年ごとには家の見直しをすることを忘れてはいけないのではないだろうか。それは同時に、わが人生を確認するうえでも大事なことではないかと思っただ。



西田恭子のプロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。